

《論 文》

日本語教育における引用表現

立 川 和 美

On Quotation in Teaching Japanese as a Second Language

KAZUMI TACHIKAWA

キーワード

語法 (Narration), 日本語教育 (Teaching Japanese), 引用 (Quotation)

1. はじめに

本稿においては、日本語教育の現場における引用表現をとりあげ、その実態を観察することによって、おもに大学学部レベルの実践への応用を考えたい。一般に、日本語教育では、書く、読む、話す、聞くの四技能について、バランスのとれた能力の育成が求められるが、大学学部での留学生教育においては、口頭で論理的に説明する（プレゼンテーション）能力や、レポート・論文を作成する能力の育成に特に力が注がれる。引用は、こうした発信的作業のいずれにも関わりを持つが、特に、文献や資料から得た情報や知識をもとに書くライティングスキルには不可欠の技術である。こうした引用に関して、その典型的な構文は、初級の段階で既に導入される。

- ・ミラーさんは来週大阪へ出張すると言っていました。
- ・すみませんが、渡辺さんにあしたのパーティは6時からだと伝えていただけませんか。
- ・「一週間以内に警察へ来てください」と書いてあります。

（『みんなの日本語』第33課 初級Ⅱ本冊 p60-61）

最初の2例は音声言語の間接引用、3つめの例は文字言語の直接引用の例であり、引用動詞については典型的な「と言う」のほか、「と伝える」「と書いてある」などが用いられている。ここから、学習者は、「と言う」の引用動詞をベースとして早い時期から引用表現を使いこなすことが可能であると予想される。しかしその一方、複文構造によって発生する時制や言い換えなどに関わる種々の言語運用の問題など、引用にはクリアすべき課題が多いことも事実である。

本稿では、こうした日本語の引用表現が持つ性格をふまえ、日本語教育の現場におけるその使用の実態を記述することで、今後の指導の方向性について考察を行う。以下ではまず、日本語教育における引用をめぐる先行研究を概観した上で、留学生（大学学部生）を対象とした日本語教育における談話（音声言語）、文章（文字言語）のそれぞれに見られた引用表現を観察し、その特性を明らかにしていきたい。

2. 日本語教育の領域における引用に関する先行研究

本章では、日本語教育における引用に関わる先行研究を概観したい。引用については、日本語学では統語論、また欧文では小説における話

法の研究が中心とされているが、第二言語習得ではこれらとは異なる視点からの研究が行われている。

まず、引用の習得段階についての網羅的・縦断的な研究として、杉浦（2007）がある。これは表題にある通り、記号論や機能的統語論といった角度から、タガログ語、タイ語、中国語などの母語話者の第二言語学習において、「習得のプロセスがどのように進むのかを、言語使用の実態を記述することによって明らかにし、日本語教育に対する新たな視点を獲得すること」（p40）を目標とした研究である。ここでは先行研究として、第二言語としての日本語の引用表現の習得と、第一言語習得における引用表現の習得とに関するものがそれぞれ示されている。前者に関しては、鎌田（2000）やKaplan（1993）などが取り上げられている。引用表現における心理言語的プロセスの解明を試みる鎌田（2000）では、日本語学習者における「情報伝達に関する母語の影響の可能性」や相対的に低い日本語能力レベルの学習者の困難形式回避ストラテジーの行使による直接話法の非用^(注1)などが指摘されている。また、Kaplan（1993）は、米国の日本語学習者を対象に、引用文を構造的に補文構造ととらえ、日本語の機能範疇の習得を縦断的に研究したものであるが、「L1にない機能範疇は習得しにくいという予測」を否定するなどのユニークな見解が示されている。後者については、Clancy（1985）の研究等が挙げられ、日本人の幼児言語はアメリカ人のそれより引用表現が頻繁で、言語的要因と文化的要因によって、他の補文標識や動詞連節文の表出以前に引用の「って」が表出されることなどが示されている^(注2)。

こうした先行研究を踏まえ、杉浦（2007）では、様々な母語を持つ学習者について議論されているが、ここでは特に、本研究と関係する中国語母語話者の引用表現の教室習得研究をとりあげ、引用形式や話法を中心に、主たる分析結果を示しておく。ここでの研究方法は、台湾の大学の日本語学科の学部・大学院生（男5名、

女12名）に、日本語の会話を収録したビデオ映像を2度見せて、その場面の会話や出来事について口頭で報告してもらうというものである^(注3)。この調査からは、以下のような結果が明らかになっている。まず引用標識については、「って」はレベル上昇とともに増加するが、「と」はレベルが上昇しても使用が変化せず、「標識なし」はレベルの上昇とともに急激に減少する。動詞の位置は、後続型が最も低いレベルから習得されておりレベル上昇とともに増加するが、ゼロ形式型とツテ中止型はレベルの上昇とともに減少し、先行型は極めて少ない。また、「と言いました」から引用動詞部分が多様化した「とV」「ってV」へと習得が進むことが観察される。この他、話法については、すべてのレベルで直接話法が多く、間接話法は非常に少ない。以上のように、この研究では、日本語習得の深化に伴う具体的な様相が詳細に記述されている。

次に、「書く」能力に関する研究を見ておきたい。この領域に焦点をあてた研究としては、鎌田（2008）、清水（2007）などがある。

鎌田（2008）では、原文からの「引用」に着目し、「言い換え（パラフレーズ）」の側面から日本人学生との比較が行われている。具体的には、中国人学部留学生20名に、「ゼミでの発表を想定し、発表の一部に文章を入れるPowerPoint（またはOHP）資料を作れ」という課題を課し、表現形式に着目して分析を行うというものである。その結果、日本人が記号や省略を含めた多様な表現形式を使っているのに対し、留学生の箇条書きは、文・句・語のいずれかに偏っていることを明らかにしている。そして、このように留学生に原文からの該当箇所抜き書きが多い理由としては、日本人学生のように、語句や内容を上位概念に置き換えたり、明示されていないトピック文を生成したりして内容を簡潔に要約（パラフレーズ）する力が不十分であるためとしている。

また清水（2008）では、日本語学習者が日本語で論文を書く時に、引用文に適切な表現を探

るため、文系論文3種類（歴史学系、教育学系、日本語学系）における引用文の表現を調査している。その結果、論文やレポートを書くための参考書では直接引用を中心に解説しているものが多いが、実際にはほとんどが間接引用によって先行研究が紹介されており、また専門分野ごとに引用方法も異なっていることが報告されている。そして日本語学習者が引用文を書く際には、要約力が必須であり、先行研究の扱い方を調べておくことも必要となると結論づけている。

福岡（2007）も、「レポート作成」というよりは「書く」作業に注目した論考だが、日本人学生と留学生を比較し、その特徴や傾向、間違いや理解度について分析している。引用については、被調査者10名中3名（日本人学生2名、中国人留学生1名）が行っており、直接引用と間接引用の両方を用いているが、名前をフルネームで書いていたり、数行に及ぶ長い直接引用が見られたりと、問題が多いことを指摘している。

談話の領域を対象とした研究としては、小林（2005）が、日常談話に見られる述語否定辞の「～ません」と「～ないです」という二表現について、引用節内での用法などを分析し、初級における日本語教育の方法論について議論を行っている。それによると、日常会話については「～ないです」の使用が、引用節内では「～ません」が使われやすく、この使い分けはスタイルの違いがすみわけを引き起こしているものとする^(注4)。その上で、日本語教科書や参考書における述語否定形の扱いには、原則として「～ません」が提示され、イ形容詞には「～ないです」が提示される実態に対して、イ形容詞以外の品詞にも「～ないです」と「～ません」の両形式が可能であることを初級レベルから提示するべきであると結論づける。

この他、大島・二通・因ほか（2008）のように、専門日本語教育という視点から大学・大学院レベルの表現能力の育成について議論したのものもある。ここでは、レポート作成における留学生の抱える問題^(注5)や、文献や資料の利用、

引用の方法等に焦点を当てた授業の報告が行われている。

以上、日本語教育においては、話す、書くという技能領域から引用の習得に関する研究が進められていた。本稿では以下、特に大学学部生という中・上級レベルの日本語学習者に焦点をあて、現場における引用表現の実際とその指導方法の方向性を考えていくことにする。

3. 日本語教育における引用表現の実際 —大学学部の留学生を対象として—

3. 1. 授業で用いられる引用表現

本節では、学部留学生（3、4年生：母語は全員中国語 男4名女5名）の「日本語講読」の授業で見られた引用表現（音声言語）の事例を観察する。この授業は、おおむね日本語能力試験1級（N1）レベルの文章読解を中心としながら、日本の文化や社会といった広い領域をカバーし、総合的な日本語力をつけることを目標としている。データは約90分の授業2回分で、それぞれ867発話、803発話（指導者と学習者との合計）だが、学習者が引用表現を使う場面は観察されず、指導者による引用表現のみが見られた。そこで以下、日本語教育の授業を展開していく中で指導者が用いた引用表現の方策を分析していくことにする。

最初に、教員が語句の意味説明を行う部分での例を見ておきたい。^(注6)

<実例1>

教員：え……と 前もお話したと思うけれども
（.）日本には最近（.）最近というか これから裁判員制度というのが導入されるっていうお話（.）しました 覚えて（h）ますか？
（中略）

教員：裁判官（.）とか……もし裁判官が……この人は（.）どういう罪だから こういうふうにしましようってたとえば（.）え……（.）二年間ね あの 刑務所に入ってくださいとか か そういうの決める人がまずいますよね？

(中略)

教員：そうすると……↑ あ(.) 裁判というのは
こういうふうに行われるんだな…………って
うのがわかってきます。

じゃあ、今の時点で 裁判を見たことがある
のは (学生名前) さんだけかな？

ほかに裁判を見たことがあるよ…………って
いう人いる？

最初の例では、過去の教員自身の自己発話を
間接引用を用いて表している。2番目の発話で
は説明を行うために教員自身が作った架空の発
話を、3つめの発話では、いずれも他者の心内
や発話を想定したものを直接引用しているが、
「あ(.) 裁判というのは～」はその場にはいな
い人、「裁判を見たことが～」は授業に参加して
いる学生の心内を代弁する形式である。このよ
うに、教員の談話には、発話内容に応じて直接
引用と間接引用の両方の形式が用いられている
ことが分かる。

<実例2>

教員：だから 要するに(.) もめごとを起こさな
い

これが尊し(.) とても素晴らしいこと 大
事なことなんだということなのだから(.)
たとえば嫌だな……↑……と思っても ちょっと
自分が譲って(.) うま……くその場を収め
るそれが(.) いいことなんだ 美德であると
いうふうに日本では考えられている訳なん
ですな？

自分が(.) これはおかしい……と思っても
(.) そんなに こ……う 強く主張し逆に相
手を合わせる そういうことで その場をう
まく こう乗り切っていきましょうと(.) ね
揉め事は(.) なるべく避けま……と そう
いうことです

これは、「和」という語が日本において持つ意
味について教員が説明している場面だが、談話
でありながらも「と」で引用が行われ、一般的

に談話で多用される「って」は用いられていな
い。特に、引用内容において、第1例では「大
事なことなんだ」、第2例では「嫌だな……」
といった話し言葉の文体が用いられているにも関
わらず、いずれも「と」という書き言葉の文体
で受けていることは注目される。最後の2例は
「と」で文末を区切り、引用動詞を省略する形が
用いられているが、これは<実例1>で見られ
た「って」で終える形式と同様に、一般の談話
にもしばしば見られるスタイルである。このよ
うに教室の談話では、文体の観点からは、一般
の談話に見られる特徴に加えて、書き言葉の文
体も取り入れられていることが分かる。

次に、教員と学生が、中国の学校における昼
食やお昼休みに関するやりとりを行う場面での
引用表現を見てみたい。

<実例3>

教員：(学生1名前) さんは？

学生1：私も家に帰って食べ(てました)

教員：家に帰って(食べてましたか)

学生1：(はい) 昼休みが長いんで

教員：どれくらいあるんですか？

学生1：えと 昼だと11時半から1時半

教員：11時半から1時半？2時間も？

学生1：そうです

教員：お昼休み

学生1：あと あーえーと 夏は 1-2時間

学生2：3時間ぐらいあります

教員：夏3時間ぐらい？

学生1：家帰って昼寝して また学校行く

教員：昼寝する……という習慣がある？

学生2：はい (あります)

学生1：(はい) あります

教員：ありますか……

このやりとりでは、初めの「家に帰って食べ
てました」、次の「11時半から1時半」は相手
の言葉を改変することなく、オウム返しに繰り
返す形式で引用が行われており、最初の例では
相手の発話の最後とかぶるようにして間髪を入

れることなく、教員が返答、引用を行っており、またこの教員の発言に学生の返答がかぶる形になっている。これは、母語話者間の談話でしばしば見られる談話展開のスピードをあげる方策であるが、同じ現象が教室活動でも取り入れられていることを示している。このように、上級日本語のクラスでは、自然な速度での会話進行が成立していることが窺える。

第3例の教員の「夏3時間くらい?」は、学生1と学生2の二人の会話の内容を合成して引用する方策がとられている。こうした教員の「繰り返し」という引用は、学生がさらに話を進展させる（家に帰って食べる→昼休みが長い→昼寝の習慣）ことを可能にしている。このように、授業内で学習者の発話を引き出し、内容展開を行う方策の一つとして、「繰り返し」による引用が用いられていることが分かる。

以上のように授業での引用表現には、直接引用と間接引用の両方が用いられており、談話特有の引用マーカである「って」だけではなく「と」も認められるなど、文章の文体も取り入れられている。さらに引用動詞が省略された「って」「と」で文末を区切る方法など、談話特有の形も用いられている。

授業の場面に応じた引用の方策という視点からは、教員が説明を行う場合は、分かりやすさに配慮し、学生たちの立場をふまえた話し言葉の想定引用が多用される。一方、学生と教員とのやりとりにおいては、「繰り返し」を用いることによって学生による自発的な内容展開の発話を引き出す方策がとられている。

3. 2. 学生の作文に見られた引用表現

本節では、学生の作文に見られた引用表現（文字言語）について調査、分析を行う。大学学部留学生（1年生男4名、女13名 母語は中国語14名、韓国語3名）を対象に、「私が好きな食べ物」もしくは「家族の中での呼び名」というテーマで400文字の短作文を課した。日本語レベルはほぼ日本語能力試験1級（N1）から2級（N2）レベルである。今回は、その中に観察さ

れた引用の例をとりあげ、自由記述においてどの程度引用を使いこなしているのかを検証したい。なお、引用の頻度については、17編の作文の中で引用を行っていたものは14編であった^(注7)。（以下、すべて表現や表記はママとする。）

まず、短い語レベルの引用を行った例を取り上げたい。

<実例4 兄の呼び名>

たまり、けんかすることもあります。その時は、お兄さんのあだ名で呼びます。「大兄」は唇が大きいから、「寛嘴」と、「二兄」は「寛嘴」の弟です。「寛嘴弟」と呼びます。そして、お兄さん達は、私のことを「寛嘴妹」と呼ぶのです。

ここでは、実際の呼び方について「 」を用いた後に「と+呼ぶ」という形が用いられている。またそれと同時に、一般的には引用のマーカとされている「 」が「大兄」や「二兄」といった形で用いられており、これらはいずれも書き手がその表現をとりわけ焦点化し、読み手に注目させるための手法であると考えられる。こうした「 」も、引用の基本的な方策のひとつとみてよいだろう。^(注8)

次に、引用部分に「 」を付し、直接引用の方策をとった例を見ておきたい。

<実例5 好きな料理>

国に帰った時に、友達に日本のすき焼きを紹介したら、「まるで中国の料理と同じではないか」と友達が言ってくれた。

<実例6 好きな料理>

ある時は1日3食ともハンバーグでした。よく友達に「ハンバーグの王」と言われています。「たまに別のものにすれば」とよく言われています、

<実例7 私の名前>

こういう名前をつけられて、心をこめて親に

「ありがとうございます」と言いたい。

これらは全て、「と言う」という引用動詞が用いられているが、例えば例5では「言ってくれた」という表現よりも「びっくりしていた」などのほうが自然であると考えられる。そういった点からは、学生は、初級の「と言う」構文から応用的な表現を活用できる段階には進めていない、もしくは「言う」以外の動詞を回避する傾向があることが予想される。例6の「ハンバーグの王」は、実例4と同じ用法であり、次の「たまに別のものにすれば」は、直接話法で友達の発言を表現した例である。「たまに」という話し言葉特有の言い回しや、「すれば」といったいいさしの文末が臨場感を高め、話し言葉の部分のみに「 」が付されていることから、意識的に直接話法を用いた記述であるといつてよい。例7も、地の文のままで「心をこめて親にお礼を言いたい」といった言いまわしでもよいところを、あえて直接話法を使用している。「 」の中の文体も丁寧体と地の文と変えていることから、やはり意識的に引用を用いた文と認められる。

これら3例は、いずれも「 」を用いた直接引用を正しく行っている。中国語や韓国語では、発話を引用する場合には一般的に“ ”を用いて記述するが、学部留学生のレベルでは、日本語では「 」をそれと同様に用いること、またそれは生き生きとした表現を可能にすることなどを理解しているといえることができる。

ここから、書き言葉においては、引用の非用という傾向は薄く、むしろ引用表現を利用して文体や内容を豊かにしようという意識が働いているといえる。

次に、「 」を付すことなく、間接話法の形式がとられているものを見てみたい。

<実例8 私の好きな料理>

しかし、人によって、好みも違う。友人なら、カレーより、日本のラーメンのほうが美味しいと述べた。理由はカレーの香りが強く、ライスより

も麺のほうが口に合うということである。

<実例9 好きな料理>

この料理は私の大好物なので、休みの時いつも自分で作っている。時々友達が家にきたら、私はこの料理を作ったりする。友達は肝とみどり色のピーマン一緒にするのは外見がきれいだし、あじもすごくおいしいと言ってくれた。

<実例10 好きな料理>

韓国の友達は皆、キムチを漬ける前に塩水に白菜を浸すのだが、その味と日本の漬物の味が似ているという。

<実例11 好きな料理>

でも、日本の寿司は価格が高いと思います。

例8では、引用動詞「述べる」が用いられているが、これは「言う」の形態変化のレベルにとどまっているものといえよう。例9では、自分の作った料理に対する友達の感想が引用されており、本来、引用部の直前の「友達は」の後に読点を付加する必要があるが、おおむね間接引用として正しく叙述が行われている。例10は、「キムチを～似ている」が引用部分で、その内部が複文構造となっているために、やや文脈に乱れが見られるが、他者発話を間接引用の形で用いている文とみなしてよいだろう。これらは全て他者引用だが、例11のみは、自分の考えを叙述する間接引用である。

最後に一つの作文の中に複数の引用の手法が観察された例を見ておきたい。

<実例12 私の名前>

でもパパは私のことを名前そのまま呼んでいる。そのことに関しては私は何度も文句を言っていた。「なんで私はほかの子供たちみたい両親に幼名をつけてくれなかったの」と両親に文句を言ってきた。でもその時、パパはいつも笑顔でそう言っていた。私は生まれた時、パパは軍隊にいたから、出産の日までぎりぎり間に

合った。この名前はお母さんにつけてもらったから、この名前をお母さんを大事にするようにずっとそう呼んでいた。なるほど、パパは私のことを名前のまま呼んでくれたのはお母さんに対する気持ちと、この家を大事にするという気持ちを持っているからだ。

第3文「なんで〜くれなかったの」の部分は、娘である書き手自身の発言を直接引用で叙述している。直前の「文句を言っていた」という表現が直接引用の後にも繰り返されているが、これは「と言う」構文からさらに内容を豊かにするための工夫が行われた表現だといえるだろう。さらに引用動詞が前置されるという上級レベルの技法が用いられ、ここでは「そう言っていた」の部分の指示語の使用等に文法的な問題があるものの、「」をつけずに引用する方法がとられている。そして、その後の父親の発言では、自由間接話法に近い表現が認められる。「私は生まれた時」や「パパは軍隊にいたから」の部分は書き手自身の視点に立った表現が用いられているが、「この名前はお母さんにつけてもらった」には、書き手自身（娘）というよりも、「本来自分が娘にやってあげなくてはいけない命名という仕事を妻に代わってもらった」という父親の心情が表現され、続く「ずっとそう呼んでいた」は父親自身の行動であると判断される。このように引用表現においては、やりもらいや視点など複雑な要素が関与するが、学生は説明的叙述を行うに際して積極的に使用していることが分かる。

4. おわりに

今回は、大学学部留学生という中上級の日本語学習者に焦点を置き、実際の授業や、作文に見られた引用表現について観察・記述を行った。

まず、授業（音声言語）における引用表現では、学習者の発話はどうしても断片的なものが中心となってしまうこともあり、引用表現は観

察されなかった。一方、指導者の側では、語句や文章内容の意味説明において引用を多用しており、「と（って）+引用動詞」という形のほかに、「と（って）。」で文末を切るなど様々な引用形式が用いられていた。口頭表現では「って」が圧倒的に多いのだが、授業という文脈では文章で多用される「と」も比較的用いられていた。また、説明の際には直接引用が、学生とのやりとりでは繰返しを用いた引用が見られ、前者は具体的表現の利用によって学生の理解を、後者は学生の自発的発話展開を促す効果をあげていた。

こうした実態から、留学生は教室において活発に発話を行うものの、その発話には引用表現は取り入れられていない、すなわち学部留学生のレベルでは引用を伴う論理的内容を持つ複文構造を話す力はまだ不十分である可能性が高いこと、そして「話す」指導では、より複雑で長い文を正しく表現する力の育成が必要であり、その中の具体的項目として引用表現は重要であることが考えられる。教員の発話には多くの引用表現がみられたことから、音声言語において、引用は理解レベルとしては十分であっても、表現レベルにまでは達していないことが分かる。

一方、文章表現においては、引用表現は多く用いられていた。特に1級レベルの学生は、文法的な誤りが若干あったものの、多様な引用の方策を身につけ、それを積極的に活用しようという努力が認められた。中上級の学習者は、すでに母語において基本的な引用の方策を習得しているものと考えられることから、基本的には日本語においてもそれを理解し、表現しようという姿勢を持っていることが十分窺える。よって、「書くこと」における引用指導の中心は、そうした姿勢をより伸ばすために、引用における文法的な項目に特化することが重要であると考えられる。

引用の際の話法の選択には、表現者の意図が反映され、間接話法においては、元発話を変形して表現する技術が必要となるが、留学生の作

文において使用が認められた。これは単に引用を行う直接引用のレベルにこだわらず、より端的に整った形で説明文を書こうという努力の表れであり、書き言葉においては引用句を用いて表現しようとする基本姿勢は備わっているのである。

ただし、引用動詞については、初級レベルで学習する「と言う」構文以外はほとんど見られなかったことから、引用動詞のヴァリエーションに関する指導も必要だと考えられる。心的状況や、内容詳述の手段としての引用動詞の多様化という方策を身につけさせる必要がある。

さらに、レポート作成など、より論理的な記述が求められた場合、こうした自由記述において成されていた引用表現が十分駆使できるのかという問題も、学部留学生の日本語学習においては重要といえるだろう。

注

- (注1) この他、丁寧体を用いた時に不適切な使用が生じやすいなどの理由から、直接話法が避けられる傾向があるという見方も示されている。
- (注2) これに関する言語的要因としては、引用表現が終助詞のような形態素「って」が使用されるといふ文法構造の容易さを、文化的要因としては母親の子供に対する社会慣習の教育に伴うインプットなどを挙げている。
- (注3) 被調査者は全員中国語を母語としており、日本語能力は、1級8名、2級4名、3級5名とある。また口頭表現を分析するという点では、この試みは、話す領域に焦点をあてた研究と見ることもできる。
- (注4) この指摘は、鎌田(2000)における「引用表現の内部に本来の発話とは異なるスタイルや表現が持ち込まれることによって、新たな伝達の場が創造されること」を参考としている。
- (注5) 文献の読み取りの問題、専門の内容に関する背景知識や語彙の不足、論理を組み立てることの難しさ、教師からのフィードバックの欠如などの問題が挙げられている。
- (注6) 以下、データの文字化にあたっては宇佐美(2007)を参考とする。なお、本稿に示した実例は、全て筆者の本学での授業実践からのものである。
- (注7) 今回は基本的に、引用に直接関与しない文法的誤りについては言及しないこととする。また、実例の後の見出しは学生の作文の題名である。

- (注8) 藤田(1992)では、池波正太郎の作品における分析で、「カギカッコを付加するかどうかの判断」の要因として、「視覚的・図形的な印象による遠近効果の問題」と「本当に所与のコトバのリアルな再現とみられるかという事実意識の問題」の二点を挙げている。

参考文献一覧

- 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese BTSJ)の開発について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15~18 文部省科学研究費—基盤研究B(2) 研究成果報告書
- 大島弥生・二通信子・因京子(他)(2008)「ラウンドテーブル 大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性—専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える—」『大学教育学会』30(2) 大学教育学会誌 59-61
- 鎌田 修(2000)『日本語の引用表現』ひつじ書房
- 鎌田美千子(2008)「プレゼンテーション文書作成に見られる留学生の日本語パラフレーズ—原文からの引用における箇条書きに着目して—」『外国文学』57 宇都宮大学外国文学研究会 31-46
- 小林ミナ(2005)「日常会話にあらわれた「～ません」と「ないです」」『日本語教育』125 日本語教育学会 9-17
- 清水まさ子(2008)「文系論文における引用文の表現方法」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』14 1-15
- 杉浦まそみ子(2007)『引用表現の習得研究：記号論的アプローチと機能的統語論に基づいて—』ひつじ書房
- 福岡寿美子(2007)「基礎演習における日本語表現について—日本人学生と留学生のレポートの事例から—」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』19(3) 97-108
- 藤田保幸(1992)「書記テキストにおける引用マーカーとしてのカギカッコの用法—池波正太郎「剣客商売」を例として—」国語文字史研究会、前田富棋編『国語文字史の研究 4』和泉書院 189-221
- Clancy, P.M. (1985) *Acquisition of Japanese. The Crosslinguistic Study of Acquisitions: The Data*. 1 Slobin, D.I. (ed.) 373-524. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Kaplan, T.I. (1993) *The Second Language Acquisition of Functional Categories: Complementizer Phrases in English and Japanese. A Dissertation Presented to the Faculty of Graduate School of Cornell University*. Ann Arbor, MI: UMI Dissertation Services.